Giảng dạy tiếng Nhật và nghiên cứu văn hóa Nhật Bản tại Đại học Otago (New Zealand)

NANYO GYO*

Bài tham luận này giới thiệu tình hình giảng dạy tiếng Nhật và văn hóa Nhật Bản tại Trường Đại học Otago, nằm ở cực Nam trái đất. Song song với việc đào tạo tiếng Nhật, trường giảng dạy văn hóa Nhật thông qua tiếng Anh, tạo cho sinh viên cơ hội tiếp xúc với nền điện ảnh, văn học và văn hóa đại chúng của Nhật Bản, gây hứng thú đối với văn hóa Nhật. Ngoài ra bài viết còn nêu lên những nỗ lực của trường trong việc đào tạo tiếng Nhật và công việc của những sinh viên đang đi theo con đường nghiên cứu văn hóa Nhật Bản.

ニュージーランド・オタゴ大学における日本語教育と日本文化研究

1、概況

ニュージーランドと聞くと、みなさんはどのようなイメージを思い浮かべますか。羊がたくさんいる、飛べない鳥キウィがいる、果物のキウィがある、ペンギンがいる、それから、映画『指輪物語』(The Lord of the Rings) で見られる美しい自然風景がある、ということでしょう。

南半球のニュージーランドは北半球の日本から非常に離れてはいますが、1998 年に日本はニュージーランドの第二輸出相手国となり、第三輸入相手国になりました。また、日本から多くの観光客がニュージーランドにやってきています。そのため、日本に興味をもって、日本語教育が普及しています。初等、中等教育の学校で日本語を教えている学校は多いです。

国際交流基金の調査によれば、2006 年現在、世界の中で日本語学習者数上位十カ国の内訳は、韓国がトップで 910,957 人がいます。その次は中国(684,366)、オーストラリア(366,165)、インドネシア(272,719)、台湾(191,367)、米国(117,969)、タイ(71,083)、香港(32,959)であり、9 位はベトナムで 29,982 人がおり、10 位はニュージーランドで 29,904 人です[1]。

一方、高等教育機関学習者上位 18 カ国の内訳を見れば、

* PGS.TS., Trung tâm quốc tế nghiên cứu văn hóa Nhật Bản

[1] 国際交流基金『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2006 年－(概要)』

１）中国：407,603
２）台湾：118,541
３）韓国：58,727
４）米国：45,263
５）タイ：21,634
６）インドネシア：17,777
７）ベトナム：10,466
８）フィリピン：9,398
９）オーストラリア：9,395
10）カナダ：8,508
11）シンガポール：5,708
12）モンゴル：5,368
13）香港：4,971
14）ニュージーランド：2,230
15）メキシコ：1,750
16）ブラジル：1,560
17）インド：1,444
18）ミャンマー：1,382

ニュージーランドの若い人たちは高校で日本語を勉強すれば、大体、日本における交換学校へ留学する機会に恵まれています。この目で日本社会をみることができた人は、日本社会に抱いている興味はますます高まります。また、日本に留学する機会がなくても、日本のアニメの虜になって日本語を勉強しようとする人は多いです。国際交流基金や他の財団がニュージーランドの日本語教育に物的・人的資源を投入してきたため、日本語教育は衰えることなく、持続し続けてきています。これは近年の北米の日本語教育の情況とは非常に違います。

現在、ニュージーランドの高等教育機関 37 校のうち、日本語の専攻があるのは総合大学７校と専門大学３校です。一番早く日本語教育を始めたのはマッセイ (Massey) 大学で、1965 年でした。それから、オークランド(Auckland)大学は 1968 年、 ワイカト(Waikato) 大学は 1970 年、カンタベリー (Canterbury) 大学は 1971 年、 ビクトリア(Victoria)大学は 1989 年、それぞれ日本語教育を開始しました。

私が十五年間勤務してきたオタゴ(Otago)大学は 1869 年に成立された、NZ で一番古い大学ではありますが、日本語科の設立は 1993 年２月です。ほかの大学よりずっと遅れてしまいました。伝統の長い大学が新しい学科を設立するときによく見られる問題の一つと言えましょう。

日本語科の設立と発展のために、私は微力ながら、骨身を削ってきました。ここ十五年、日本語と日本文化の科目を開設し、honours programme, MA programme and PhD programme をも提供してきています。

以下はオタゴ大学の日本語日本文化の教育についてご紹介します。

２、オタゴ大学の日本語と日本文化の教育

オタゴ大学 University of Otago はニュージーランドの南島の東南 Dunedin という町にあります。Dunedin は 17 世紀のスコットランドからの移民が南半球の Edinburgh を作ろうという気概で作った町です。オタゴ大学は、地球上南極に最も近い大学だと言われています。

1993 年に日本語科が成立してから、毎年、日本語を勉強する学生数は１年生から４年生まで合計二百名前後です。学生たちの日本語学習の動機は、高校で勉強した日本語を継続したい、日本語でアニメや漫画を鑑賞したい、日本の文化を知りたい、日本で生活したい、日本関係の仕事に就きたい、とさまざまです。

オタゴ大学の日本語科は三年間かけて、日本語を初級から中級後半まで教えると同時に、日本の社会、文学、映画などに関する授業を必修科目としています。ほかの学科では日本の歴史、美術、音楽、政治、宗教、経営、経済を教えていますので、私たちの学生は日本語を専門的に勉強しながら、日本文化に関する基礎知識を身につけています。

現在、毎年約 15 名前後の学生は、日本の交換大学（小樽商科大学、東京大学—1996 年、文京学院大学、立正大学、弘前大学—2000 年、お茶の水女子大学—2003 年、 横浜国立大学—2004 年、慶応義塾大学—2007 年）へ留学しています。留学先から戻ってきた学生は、さらに日本語と日本文化を勉強して、毎年約６名前後、 honours programme（優秀学士課程）、修士課程、博士課程へ進学します。全体からみて人数はあまり多くありません。

大半の学生はオタゴを卒業して就職します。多くの卒業生は、日本政府の JET Pogramme に参加して、日本で英語を教える仕事につきます。他の一部分は、日本関係の仕事（政府機関、旅行会社、商社、会計会社、ジャーナリズム、法律事務所など）をするようになっています。もちろん、日本と全く関係のない仕事をするようになった人も少なくありません。

今、オタゴ大学の日本語科の学生の三分の二はアジア諸国からの留学生です。オーストラリア、アメリカ、ヨーロッパからの留学生もいますが、少ないです。ベトナムからの学生は二、三人だけいました。中国、台湾、香港、韓国、マレーシアなどからの学生は、漢字の知識がすでにありますので、ニュージーランド出身の学生に非常に羨ましがれています。非漢字圏の学生にとって、日本語学習の中で最大な悩みは漢字の読み書きです。

日本文化に関する授業は大体英語で教えているので、日本語が上手ではなくても、日本文化について習うことができますので、学生たちは喜んで参加しています。そして、日本文化の面白さが分かれば、日本語の勉強で苦労していても、我慢してくれます。

私が教えている日本社会や日本映画の授業はわりと成功していて、ヨーロッパやアメリカからの留学生が、わざわざこれらの科目を取ろうとしている傾向があります。折角ニュージーランドに留学しているから、ニュージーランドの歴史や文学について勉強したほうがいいのではないか、とアドバイスしたら、「オタゴへ留学した先輩がこちらの日本文化の授業が面白いと教えてくれたから、ぜひ取ってみたい」という返事でした。後でよく考えてみると、私の採点が甘かったことが評判になったのかもしれません。

３、オタゴ大学の MA と PhD コース

オタゴ大学の MA と PhD コースに進学した学生はまだ多くないが、みな日本文化の授業を取り、留学を通して、日本文化に深い関心をもつようになった人ばかりです。毎年、修士課程の学生は２名前後で、博士課程は１名です。これらの学生たちはすべて英語圏出身で、日本語の資料を読むときは漢字と格闘しなければなりません。

ニュージーランドの大学の MA コースは二種類あります。一つは学位論文を中心とする thesis only MA で、もう一つは授業を中心とする taught MA です。

Thesis only MA の学生は、すでに優秀学士学位(BA Honours degree)を取得して、ある程度の研究能力を持っている人たちで、MA コースでは自分の決めた研究テーマのために資料を調べ、論文を一年間以内に書きあげることが要求されます。人文科学の修士論文の英語語数は約４万くらいです。それと違って、taught MA は普通の学士学位(BA degree)を取得してから、一年間くらい MA コースの授業を四科目くらい取り、短い論文を書いてから、二年目になって長い修士論文を書きます。

オタゴ大学の日本語科は、thesis only MA だけを提供しています。なぜかというと、教員が不足していて、大学の授業だけで大変苦労していますので、大学院の授業をさらに開設することは不可能に近いです。そのため、日本語科の MA コースに入ろうとする学生は、まず指導教官と話し合いをした上で研究テーマを決めます。それから、研究計画を書いて、審査を受けます。審査に合格した学生は、週に一回、指導教官と会い、研究状況を報告し、指導を受けながら論文を少しずつ書きます。

この thesis only MA という制度は、有利な点と不利な点があります。有利なのは、基礎のよく出来た学生は、短期間で自分の研究に集中し、学位論文の執筆に専念することができ、その研究をさらに発展させて、PhD programme へ継続させることが可能です。不利なのは、授業に出る必要がないので、自分の研究テーマ以外の知識を学ぶ機会が少なく、視野が狭くなりかねません。また、PhD programme は三年間のコースで、thesis only ですので、授業とは無縁になります。大体、三人の教官に指導されながら、論文を書いて行きます。

日本の大学や北米の大学は、MA コースも PhD コースも必修科目の授業があり、そこから関連知識を吸収しながら、学位論文を書く制度となっています。長期的には学生の学問上の発展に非常に有利だと私は思います。

オタゴ大学の Department of Languages and Cultures（言語文化学科）は、現在、taught MA コースを準備しています。日本語、中国語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ポルトガルト語という六つのプログラムに通用する、言語と文化に関する理論や研究方法などの授業を提供しようとしています。うまくいけば、2010 年からの開設になる見込みです。

4、日本語教育から日本文化教育へ

私達は日本語を教えると同時に、日本文化の多くの側面に関する情報を学生に提供していますし、ニュージーランド駐在の日本大使館の提供してくれる日本映画を年に４、５本上映します。現在、オタゴ大学の日本語プログラムの常勤教員は４名、非常勤も４名です。常勤教員は、日本の文学、地方文化、環境、日本語教育などに関する著書を英語と日本語で刊行してきています。その一部分は教科書としても使われています。

オタゴ大学の図書館は、ここ十五年来、精力的に日本関係の図書の収集に力を入れてきました。現在、日本語の書籍は七千冊以上となり、日本関係の英語書籍は八千以上となっています。日本研究に必要な基礎文献は大体揃っていると言えます。図書館の充実は、学生の学習と教員の研究と教育には非常に有利です。

私たちは日本語と日本文化の同時教育を日本語科の方針としています。一年目の学生に英語で日本文化を教えると同時に、日本文化の研究方法をも教えています。それは、テーマの立て方、資料の調べ方、論文の書き方などを含みます。日本語を専攻する学生は、BA degree (学士学位)を取るには、日本文化の科目を四つ取ることになっています。BA honours degree（優秀学士学位）を取得するには文化科目を五つ以上取らなければなりません。

学生達は、一年生から研究のための基礎知識を徐々に勉強していれば、将来、大学院で専門的な研究をする力が身につくことが可能になります。日本語科の今までの honours、MA、PhD コースの学生の研究テーマは多種多様で、日本文化に幅広い関心を持っていることを示しています。たとえば、日本の文学、映画、アニメ、テレビ、大衆文化、社会、女性、民俗、陶芸、差別問題、教育、観光、相撲、日本語教育、憲法、ファッションなどのテーマがありました。

それを実際指導してきたのは主に私ともう一人の教員です。学生が選んだテーマが私たちの専門分野ではなくても、学生が研究心に燃えているならば、学生と一緒に勉強することにしています。多くの場合、学生より一足早く徒食館に駆け込んで、専門文献を読んでから、いかにもその分野の専門家のような顔をしながら、それぞれの文献の肝心な部分を学生に教えて、原文を読む力が不足する学生を助けてあげています。

日本語の能力が不十分な学生は英語の文献に頼りがちで、英訳されていない重要な日本の文献を見逃してしまうか、あるいは読んでもよく分からない問題があります。このような問題は研究の進行を妨げています。ですので、日本語の学習を継続してもらい、日本語の文献を一緒に読むことが大切です。学生は日本語の文献を読むときに、漢字で挫折することが多いです。今、漢字を書いて、読み方と意味を調べることができる電子辞書が販売されるようになっていますので、学生には非常に人気があるようです。このような電子辞書を使えば、学生たちは日本語の文献をもっと積極的に読むようになっているようです。

また、MA、PhD コースの途中、奨学金などを入手して、数ヶ月日本へ留学することも勧めています。学生が日本で資料を収集し、さらに日本語に磨きをかけることが出来るからです。

まとめ、

オタゴ大学で日本語科が設立されてから十五年間経ちました。日本語が上達しなければ、日本文化の研究は深まらないし、日本文化に興味がなければ、日本語も上達しにくい、ということが分かりました。そして、学生が将来研究

者になれるように、早い段階で英語で日本文化の授業を提供してよかった、とも思っています。

毎年、日本語専攻の学生は少なくとも 30 人卒業しています。しかし、大学院の卒業生はまだ少ないです。honours は６人、MA は６人、PhD は２人です。まだ人数が少ないのですが、少しずつ発展してきています。

私は国際日本文化研究センターに勤務するようになりましたので、オタゴ大学の日本語科から離れなければなりません。自分の子供はまだ十五歳で、一人立ちは出来るかしらと、気を揉んだりしています。でも、多分大丈夫だろうと思います。